

筑波の記

昭和20年「櫻井うめ日記」

筑波の記

昭和二十年『櫻井うめ日記』



「筑波の記」は、主人の祖母の日記のほんの一部です。寺子屋で学んだ文章には、句読点もありません。くずした書体は読み解きづらく苦労しました。しかし、何とかして草の根に生きた一無名の女の戦争体験を自分以外の人達にもお伝えしたい一心で取りくみました。表紙の写真中、筑波山を背景に写った古民家は祖母うめの家、すなわち主人の実家であります。



平成17年6月発行
つくば市神郡108

資料提供者：櫻井京子氏（土浦市生田町）
資料複写&まとめ：木村 滋

まえがき

翁おうなの絶えてより、久しく荒み呆けて居た土蔵造りの隠居の間に、その小さな千代紙人形は身を横たえていた。箱階段のある店座敷の埃色した古畳の上、黒髪と華やいだ衣裳のまま、紙人形はどれ程の時間を、そこに倒れ伏していたのだろう。

恐る恐る踏み入って目を凝らし、一ひらの薄べらい物が紙人形と知れた瞬間、だれかが訪れるのを幾十年も待ち焦がれていた様なその人形に人懐かし気な哀切の叙情を見たと思った。——これは、だれ？

それはわずか四年ばかりの時間の差ですれ違い、現世で会う事が無かった主人の祖母うめ殿の、手遊びに折ったやも知れない千代紙人形が、二つの時代を取り次ぐと、話しかけて来たのかも知れなかった。

かねてより当家一族の間で伝説となつて来た家宝とも呼べる物に、「櫻井うめ日記」がある。明治十八年（一説では十六年）に此の家に生まれ、昭和四十九年に没するまでの長命の内、壮年から老年に亘る時期を、篤実にしるした日々の記録は、かつての此処の暮しや時代の推移を知る上での貴重な資料でさえある。手摺れて傷んだ紙のタイムカプセルをそつとひもとけば、細やかな行書体で綴られた終戦に向かう知り得る限りの情報、支那事変から太平洋戦争へと駆り出された末子への母の心情、そして又日記にしたたった大粒の涙の痕跡が見てとれる。それを原文のまま今の人達にも分かる文字に読み解く作業に、私ごときが手を染めてよいものかためらいつつも、己の根気を過信し、主人の優れた記憶力を頼みに、とうとう手を着けて了つた。

終戦の年（昭和二十年）及びその前後にスポットを当てて、筑波町神郡の先人達が、この国難の時を生き抜いた様子、その一端を次の世代に継いでおければと専ら願うだけである。

戦後六十年の節目に

櫻井 京子

十一月三十日

【昭和十五年】

夜中一時半おくらさんに起こされた赤飯の仕度をするので早く来てくれたのだ六時半頃家を出て北条駅へ向かった付添として主人同道北条駅の見送人の多き盛大さに驚いたホームの先の何処までも人の波旗の波声をからして万歳の声に送られる兵士の喜びも又格別男の花だ今一度戻つて送つて貰ひたい帰つて又明日出るかと笑つて居る

十一月一日

水戸東部三十七部隊へ入隊（支那事変）

十一月四日

正巳が入営してから四日目を迎へた今日来た葉書に只珍しく驚く事計りだとしてある主人はうん珍しいかこう記くより外あるまいと七日の面会には必ず来てくれと記いた文面が強く胸を打つ逢つたら何を語らうかそんな事で頭の中は一杯だ

（註一）櫻井貞次郎・うめの三男 正巳——八ヶ月勤めた三菱商事大阪支店より十一月半ばに入営の為帰宅
（註二）櫻井貞次郎は日露戦争の武勲により金鵄勲章を授与された勇士

十二月七日

朝四時に起き仕度をして五時頃から来て居たおますと新宅の昌之助さん西の伝三郎さんと打連れて大貫へ急ぐ途中西のおしんさんも待つて居て一緒になり込んだが満員身動きもならぬ始末水戸下車十時半に中食を済ませバスで営前までのり内へ入らうとして川尻の和一郎と洋一に逢ひ共に営内へ入つた折悪く雨降りとなり一時まで待ちやつと出て来た正巳の軍服姿を見られた逢

つて第一番に口を切った一言何か甘い物を持って来てか——と蒸し菓子を
出したら食べたかったよこれを——とさもうまさうに頬張って兎に角待っ
たよ今日の目を——と元気で語る一言一句も聞きもらさじと熱心に聞いた
誰云ふとなく明日八時に出発と云ふのが耳に入り主人と私だけ残ることに
して帰って貰ひ藤田屋へ一泊

(註一) 旧筑波線大貫駅

十二月八日

昨夜新次郎^(註一)へ今日の出発を打電今朝又田端か品川で逢へる知らせを打った
勇ましい沓音で駅へくり込んだ第一部隊十分位の後正巳^(註二)らが楽隊や市民に
送られて入って来た主人が先に正巳を見つけあつた正巳居た居た私も思はず
手を挙げて正巳正巳と招いだ白線を引いて停止線を見張って居る巡査の前
も忘れて線を越えて出たが正巳から寄ったか覚え無いが右の手をしっかりと
握られた時の言葉にも現はせぬ瞬間だったが正巳の姿は見えなくなつた胸
ふさがるゝ思ひに泪はとめ度もなく流れる主人に見られても恥かしい人前
もあると心の駒にむち打てど何の効も無くおしんさんにしつかりしてと慰
めた自分がこれで何とすると自分を叱つた兵士全部が汽車にのり込み面会
人をホームから出す時の騒ぎも死物狂ひの先を争う有様自分もその一人や
つと見付けた時の嬉しさ元気で語つて見送つた

(註一) 貞次郎うめの次男

十二月十四日

こゝ二三日快晴が続いて気持よい正巳ら一行も海路穏やかに北支(支那事
変)に上陸した事と思ふ国民徴用令で六十五才以下一五才までの国民登録
されると聞いた軍人として立派に御国の御用に立つ正巳は幸福者だと思へ
るようになった正巳の帰るまで年をとらずに元気で待つ事と仕様

【昭和十六年】太平洋戦争開戦

十二月八日

朝食後臨時ニュースで日米戦争が始まったと聞いて驚いた次々に入るニュ
ース早くも英艦二隻撃沈米艦二隻拿捕航空母艦撃沈飛行機五十数台撃破米
運送艦撃沈何と云ふ我が軍の強さ素早さニュースを聞く度に驚きと感激で
胸が一杯だ神国日本の輝かしい戦果は世界を驚倒せしめた

十二月十一日

今朝のニュースによればチャーチル首相がルーズベルトと会見した英国の
主力艦を見事撃沈せしめたと云ふ何と勇ましいことだらう只もう胸が高鳴
る計りだ水戸の茨城会館で県下常会長の会合があり主人が二番で出水した
今后国民もどんな辛苦に遇ふかも知れぬ故充分心を引締めて日常生活から
考え直さねばならぬと主人もくり返し云つて居る

それから十七年十八年十九年と戦さは続き

【昭和二十年】本土決戦の年

一月一日 晴

ヒ島決戦^(註一)の中に昭和二十年の元旦を迎ふ祝婦人会一同にて筑波神社参拝出
征兵士の武運長久を祈願し白滝神社六所神宮跡蚕影神社を参拝一時過帰宅
おさく^(註二)は春子美智子を連れて蚕影神社参拝に行く珍しくこゝ両日敵機の空
襲なし

(註一) ヒロピン島 (註二) 戦の運命 (註三) 長男義広の妻 (註四) 義広おさくの長女次女

一月二日 晴

徴用列車にて春子航空廠^(註一)行今日から通勤の為荷物の搬出の手配をなす先年

女中として雇入れた事のある館の榎戸庄一郎氏の長女の縁付先に宿を決め四月までそこから通ふ事となる

(註一) 海軍霞ヶ浦航空廠

一月六日

土浦東宝映画館で学徒の勤労と一日の生活を映画にして父兄及家族に見せると聞き是非見たく思つて居たが事情が許されず思ひ止んだとして蚕影神社参拝をして漬物をする

一月七日 晴

常会へ配給の品を配布すべく武さんに手伝はれて朝九時に始まる正確なくじ引で決つた割当の事不満を云ふ者は一人も無く午后三時までにはすつかり配給済みとなる洗濯漬物と冷たい仕事の為手の痛み強く湯に入り義に注射をして貰つて床に入る

(註一) 町内の隣組システム

(註二) 義広

一月八日 晴

床の中で五時半の報道を聞きルソン島から全ヒ島の決戦は呼吸もつまる思いがする川尻へ貴美子の産着発送の手紙を記く上町精米所が営業停止となり六所柳原へ小麦と米各一俵精米を依頼する

(註一) 筑波山根地区の北東

一月九日 晴

特別攻撃隊の出撃前の様を報道班から伝へて来たのを聞き炬燵の前に立ちすくんだ十八才の若者最年長者が二十才何れも選ばれての出撃志願でない友の肩を叩いて突込む時は目をつぶつてするか俺は最後まで目を見ひらいて敵艦をにらんでやると云つたとすべてを捧げて国家を救ふ純心な若者の

心尊いとも何とも伝ふひ様が無い注射が効いて手の痛み忘れたように快くなつた空襲警報が鳴る南東のあたり高射砲煙が見え大きな音響まで聞える京浜地区から関東北部と荒し静岡方面も爆撃して退去報道によって知つた甘藷から甘酒の製法
沸騰した湯の中へ細かく刻んだ甘藷を入れ煮えてくれた頃を見計つて火を引き八十度にさめたところへ麴を入れてかき廻す

一月十日 晴

今晩又空襲あり二機本土に侵入三四十分後に退去の報道あり県より廃止された飯田庄市氏の精米所に付て復活運動を宗一氏より頼まれ本日正后常会役員会開催の報を廻した柿とぶどうの枝の剪定に一日は終えた夜八時過又空襲警報ありルソン島リンカエン湾より敵上陸の報道に驚いて昼夜を分たぬ本土空襲敵も必死だと思ふと身に浸みる

(註一) 玄米をついて白くする所

一月十一日 曇天後晴夕刻小雪

白滝神社参拝に行く日どりの思ひ違いで明日参拝の人もあるらしい午后浅漬の漬替だけで陽は落ちた川尻から依頼された竹の件で主人骨を折つても竹割の人を頼めず折角買入れた竹を又返戻してしまつた現下の世相は恐ろしい迄に不自由になつて来たお米と酒をやれば万事うまくゆけらしいが各自の食料に不足のところやり様もなく頼まれ甲斐も無く残念だ義が鎌倉行の切符を買ふために闇で十五円といふ下駄をサーピスに北条駅長に頼み入たるところ白米一斗五升持参されたしとの返事で只太息のみ
おさつの煮汁で水飴を作る方法
おさつを煮た後の汁へ大根おろしを入れてトロ火にかけ煮つめる

(註二) 正規の取り引きによらない事物の買売

一月十三日 晴

廃止された精米所の復活運動の件武井庄一氏からは非と頼まれた主人が文面を作成するこれによって常会一同に認印を貰って県へ出すと云ふ方法月毎に変わる物価に驚かざる玉子一ヶ五十銭が普通となつた公魚百匁二円五十銭ゴボー一貫目三円雇人農四円五円美智子帰廠春子は飛行機の修理が忙しく休めない由川尻の三級酒三本と交換の小包発送する(くし白粉とき皿おしろいアミ歯ブラシ三本ボタン大小込二十ヶ)

一月十四日 晴

東京の話聞く度に驚かされる日本橋三越の地下鉄のり場から三共薬局室町食堂の辺り全部焼失したと省線神田駅附近も焼失浅草も少なからず焼けた由ルソン島の戦が今後の国運を決するところとは云へ連日B 29の本土来襲と肩に火の付くこの急場の難関をヒ島の指揮官山下將軍が如何なる戦をするか敵に勝手なまねはさせぬと自信満々で語つたと報じて居るが国民は絶対の信頼をかけているだろう餅ヂャガ芋など持ち筑波駅から上京した新はどうしたか各駅で狩込^(註)と聞いたがうまく通れたかしら

(註) 浮浪者罪人を追ひ立てて捕まえること

一月十五日 晴

美智子徴用列車で廠に行くおさくも一番下りで下館行公休日で家の中は火の消えた様新宅の莊吾さん昨日五時に帰京の途中北条^(註)南市場前で巡査に調べられ食料全部昌之助が持帰つた由新次郎はどうかと照会の葉書を出した

(註) 藪買から持ち込まれた藪の検査をする所ここから各製糸工場へ運ばれる

一月十六日 晴

六時半の起床少し遅いと思ふと心が急ぐ昨夜半天仕立に十二時まで頑張つたので眠かつた近頃呆れる程忘れっぽくなつた仕立物をして居てヘラ付を間違えて何度となく測り直して又忘れるあゝ天なり命なり止むを得ない夜

春子帰廠明日一日を休んで行くと云ふ飛行機の一機でも多く一刻も早くと要求される重大な今休ませたくないけれど咳が出る様子体を害ねでもせぬかと又案じられもする

一月十七日 晴

昨夜も警戒警報あり敵いよいよ身辺に迫る感つよい夜決戦のヒ島より帰りてとの題で放送が有つた最後に山下將軍の言として敵の傷付かざる航空母艦三十輪送船舶三百五六十隻これに対して我方飛行機人材共三百八九十で足りると云つたとかルソン島の大攻防戦の火蓋を切られるのが今日か明日かの今正巳の身辺を思はず居られぬ

一月十八日 晴

昨夜も警報ありと今朝聞いた母屋の井戸ポンプが凍つたのは今年初めて三時半に起こされ春子やつと起き四時半母に送られ五時半発動員列車で航空廠に行つた寒いことだろうヒ島の戦況を聞く度に呼吸のつまる様だ日本の切込隊を極度に恐れる敵は戦車一台に四人の見張りを置き歩哨は草やぶの陰などにかくれて居る方木へ釘を打付けたものを並べたり軍犬を置いたりして居る又神風隊の攻撃をおそれ空母の偽物などを作つて我方の目をごまかさうとして居る又ニューギニア攻撃の二倍の戦車を使用して居ると聞いて胸を打たれる

一月二十日 晴

今朝二人で行つた動員列車の音を聞き起きてしまった寒からう冷たからうと思ふと可哀想になる然し常と違ふ決戦の年軍工に働く乙女も戦場の勇士の士気を高揚するのに大いに役立つと聞いて寒いなど何でも無い義帰つた新の宅へ一泊して来た由帝都の空襲も一寸見ただけでは大した事もないと云う帽子屋へ寄り仕入れをして来た向ふ見ずに仕入れ一点張でゆく彼の仕方が目下のところ大当りで思はぬ利益を見て居る戦時下とは云へヂャガ芋

一俵十五円甘藷一俵三十円二級酒一升五十円の闇相場には驚かされる実際の売買を見たのでは無いが……

一月二十一日 晴

おきよさんと鬼子母神社参拝に行く旧年末の為か驚く計りの参拝人だった帰って中食午后炬燵で新聞見日誌記来訪者の相手で尊き一日は過ぎた精米所復活運動の為村長までのり出しての騒ぎ主人も担ぎ出されて遂に常会内の同意書を記かされたつまり申請事情を記いた事だろう

一月二十五日 晴風

宿下りして居た女中が帰って来たのを幸に主人は山へ行く木の枝剪りを頼みに榎戸庄一氏宅へ行く西の強風で砂埃の渦巻く中をやっと歩く様だったと島戦況も敵兵統々援隊到着を報じて居る勝つとばかり思はれない輸送上の都合により下関方面行急行四本運転中止切符の発売中止と報じて居たが先日名古屋来襲の敵の爆撃を受けたのかもしれない軍部の輸送に事欠く様な事になったら一大事だこの戦何卒勝たしめたまへと心の中で神佛に掌を合わせる

一月二十七日 晴

昨夜警報で夜耽かしをした為今朝は六時半過ぎたのも知らず眠り込んだ仕立て意のままにならず佛生寺の者来てゲートル^(註一)仕立を頼まれとうとう明日の日曜日を楽しみに思ったが間に合はず深谷行^(註二)又取り止めにした春子三時美智子終列車で帰宅午後三時に空襲警報あり東部軍情報によれば東京都内に五六ヶ所火災起こり夕刻まで燃えつづけたらしかつたが定めしひどい事だろう庄吾さんや新次郎宅はどうか会社は無事かと胸を打つ

(註一) 西洋風の巻き脚絆(兵士が脛に巻いた布帯) (註二) 現在の霞ヶ浦市

一月二十九日 晴

食糧難に苦しむ都人に比べ田舎の呑気さ肉を買ってライスカレーを作ったから子供ら食傷してつた指の怪我で針仕事が全々出来ぬ仕立に出すより外無くなったと島決戦ビルマ戦線も苦戦らしい独ソ戦も独軍苦戦の報道なり日独必至の場合空に特別攻撃隊陸に挺身切込隊肉弾突撃隊と必ず敵を仕止めるの戦法で最前線の將兵力闘をきく度手に汗握るばかり

一月三十日 晴

朝から乾燥諸作りをする幸一が久しぶりに来た青森へ徴用で行って働いて居たのが十四日間の休暇を貰って帰った由咄によればトーチカ^(註一)など大分作った由上陸の不安があるのかしらん常会への配給品を配り終へたところへ少しばかり追加配給^(註二)ニツケル貨の引換と常会の用はかなり多い義が健康ならどんなに嬉しいか知れないのだが……食養会に入会して是非病身から健康体にたち直らせたい心で一杯だ

(註一) 鉄筋コンクリートで作った小形の塔 (註二) 飛行機を作る材料として使う為

二月一日 雨

公休日筑波神社参拝の日春子の風邪も仲々治らぬ廠の方へ都合上困った九時半頃家を出て参拝済まして帰ったのが十二時随分かゝつた春子に笑はれた米の供出について筑波郡が一番遅れたと聞き情け無くなった大貫系賀悌治さん宅で十六俵の供出を承知せず村長やら村の巡查など行つて毎日かゝり合つて居る由又農会長系賀次郎兵衛氏宅へ村民押しかけて暴挙に出んとし特高課警察まで出たの騒ぎと聞き悲しいやら不安に暗くなる夜報道にヒ島の決戦を聞きこゝ一週間中に或いは重大化するかも知れぬと報じたマニラを敵にゆるさねばならぬ事になるのかと思はれた

二月三日 晴風

昨夜の雨に農家は大よろこび大小麦も良くなるだろう今日越年祭と新聞に見えたので急ぎ豆いりを作り年越をする主人が六十五才自分が六十三才義広四十二才おさく三十八才春子二十才美智子十七才勇十五才直十四才美枝子十二才才十才例年の通り車座になつてお目出度うを祝ひす^(註一)甘で福茶を頂

いた

(註一) 上新粉を二度蒸して搗いた菓子

二月八日 小雪夕刻晴

昨夜思いがけぬ雪降り餅搗に森次と任三郎が来ておさだも手伝いに来てくれた決戦下食料不足の折とてのし餅一白づゝ栗餅甘諸餅作り正后までにすつかり終へた主人は緊急常会長会議に出席帰つての咄に作谷飛行場への人夫割当で延二千五百人必要各戸十日位出勤の筈三月中に出来る予定とか国を挙げて戦争必勝への道へ全力を注ぐ今の日本生きるか死すかの運命の決するところ

(註一) 下妻街道(125号) 高道祖の隣

二月九日 晴風

温かい南廊下で一日中餅切りをする手の痛みは治ったが歯が抜け出して痛む六十路路を越しては凡人は用に足らないせめて正巳の帰る日まで元気で居たい

二月十日 晴

食養会の件で斉藤ふくさんに照会したら講義録を送ってくれたがそれに付いて感想も云つて無い旧二十八日で白滝神社参拝に行く山腹で敵機を見た三時過頃敵編隊延九十余機来襲東部軍情報によれば関東東北部を東進中と云ふ時頭上を通過皇軍の機か追撃の様子も見られたゆらゆらと頭上を通過する敵機を只残念ながら見守るのみ戦友会に出席の主人帰つての咄に国民学校(註一)の屋根にキカン砲の弾らしい物落下屋根瓦を破つて地下へ落ちたと云ふ

(註一) 田井村の小学校

二月十二日 晴

10

夜半目覚めて手を撫でてみた痛みは忘れたように去つた食養療法の妙を心から感ぜずに居られぬ旧元旦常会の總會午後供米完了続いて武井さん宅で完納祝となり主人中食に帰宅間も無く藤吾さん福寿さん新田修平さんと来て是非共引続き常会長を勤めて貰ひたく一同に代わつてお願いに來たと一升酒を持参した早速酒宴となりとうとう又引き受ける事になつて了つた供米や国債引受貯蓄は及ばずながら協力いたすと熱望せられ骨は折れても止むを得ないと快く承諾したので一同も喜んで帰つた孫たちと久しぶりに菓子焼をした甘味が少いので味良く出来ぬが美智子の喜ぶ様子が又なく嬉しい

二月十三日 晴

昨日の敵機が友軍機の追撃を受け鹿島灘で撃墜された報道を聞き身に浸みて有難く感じた戦争の為物資の高いのに驚かされる聞取引とは云へ鶏一羽二十五円米一俵六百円豚一匹七百円人参一貫目三元五十錢切餅一寸五分四角位三十錢ジャガ芋一貫目四円こんな品を一々買つて暮したら生活費が一日何十円か知れまい驚いた世の中になつたす甘の配給一人当り四匁で八錢つゝ義は新次郎の住宅借入に付て土浦の菊田さんをお願いして來た由間借りなら兎も角貸家は見込無いらしい

二月十五日

肥田善吉の長男入営義が見送ると思つたが行かぬ何となく済まぬ気持で落着かぬ春子は音楽会に出席美智子は北条のサーカス見物主人は女中を連れて山へ松枝始末に行くラヂオが敵機の来襲を報じて居る皇軍機の飛行機雲が大空一杯に画き出された静岡方面へも来襲を報じて居る夜農村慰安浪曲大会が国民学校内で開催出征家族も招待されたが又警戒警報が出たので止れてしまった

二月十六日 晴

二月十八日 晴

昨夜三回も警報発令今日も来襲かと思つたが日中は静かなよい日和だった午後役場よりの申入れにより兵士三名一泊の宿となる兵士は皆少尉だった何か査察でもあるらしく地図を開いて語り合つて居る

二月十九日 晴

兵士達も昨夜入浴後お酒を上げて皆大喜びだ今朝は武井さん宅に宿をとつた三人の下士官が来て沓を磨いている正己もこんな事かと思ふと何となく気安い感がある戦場で沓磨きなどして貰ふ事は無くとも下士をこんなに使ふ事が出来るのかと思ふと兵隊なればこそその感深からしめる客が皆帰つた後空襲警報のサイレンが鳴る第一から第五編隊まで主力は京浜地区らしく何もB29だと云ふ一時間足らずで解除になったが報道によれば百機来襲と云つた夕方帰つた美智子の咄に昨日も今日も全員で爆弾の後始末で一部露天で作業をしている者も居る由実に重大を思はせる昨日は通勤者四名の出勤で係官が戸別訪問だと云ふ仕事が遅れれば戦は敗れると聞いてちつとして居られぬ気がする

二月二十一日 大雪

起床して一面の銀世界に驚いた雪の中風呂敷をかぶり義は帰宅炬燵の中から障子の嵌硝子越に吹雪く庭を眺め一日を過した新次郎夜に入るも帰らず床に入ってからガラス戸をたたく音に驚き起き出した雪の為に電車停電の由十二時少し前だったが埋めて置いた火を掻立て炬燵を作り食事の支度をするあゝ母さん居てよかつた太息と共に語る勤め終へて帰り誰も慰めるところか炊事をして寂しく食事する身を思ふと何と云つてよいか分からぬ月二回位は是非折をみて上京しようと決心した

二月二十五日 晴

動員列車に乗つて美智子航空廠行き朝食前から警報あり敵小型機百数十機各所に来襲飛行場軍事施設を攻撃中と報じて居る察するに阿見や日立もその中に入るらしい敵は茨城県に侵入B29と違ふので一寸見定め困難だ丁度一時頃万歳万歳の声が出る出ると南の松の梢の少し西を真逆様に墜落する機を見た機尾から火を吐き寺山の先の辺りに落ちた空には真白い落下傘が浮かび上つた見る間に降下村民竹槍を持ち突殺してしまへと列をなして山へ登る主人も出かけた程なくそれが友軍機と知れた時の悲しさかつて覚えぬ感動に打たれた勇士は怪我は大きいが命に障り無いと聞き安心したトラックで作谷と石岡方面から軍部の者が来た館の民家に手当中の由夜九時過館の村民が兵士の為砂糖を求めに来た咄によると足手顔に怪我をし出血多量で言語も通ぜぬ程重態出血を案じて明朝までそのまゝで看護兵や村の保健婦の手当を受けて居る由敵機は引続き来襲し銃声も烈しく戸障子を震動させるので不安で堪らぬながら又見たく座布団を頭にのせて見て居る爆撃夜も防空に万全の策を講じる様とくり返し情報部の注意あり美智子を案じながら夢路に入る

(註一) 筑波山根地区の東

二月十七日 晴

昨夜終列車で帰つた美智子の咄を聞きに朝起きるなり母屋へ行つた丸大工場の一部焼失したが他はさしたる事も無い爆弾十個以上落とされたが工員係官何れも無事とのこと今朝も七時から警報発令昨日にも増して銃の打合ふ音が烈しく聞える間も無く国松の学校目ざして降下した敵が民家へ投弾屋根を突抜いて家人の足に弾丸命中すと聞いた若森へ敵機墜落三名の敵兵惨死と聞く岩瀬方面へ敵がビラを散布して文面は米国は捕虜は大切にすることから降伏して難をのがれよと云ふ意味を表はしたものだとか昨日より大部静かで予想外だ皇軍特攻隊により空母撃沈で逃げ失せたか報道によれば今日も六百余機来襲といふ臼井弁財天の縁日午後から人出も可なり

(註一) 航空廠内で丸大飛行機作った工場(エンジンなしの突込専用機)

(註二) 飯名神社

の旧己の弁天様(たるま市)

三月三日

義の血色は良くない多少水腫も見られるのに下館へ行くこと云ふ止めても出かけた間も無く空襲警報が鳴り敵機が頭上を通る爆音が障子をびりびりとゆする空中戦の銃の音もする東部軍管区情報は艦載機とB29が同時に来襲房総半島と鹿島灘を爆撃帝都へ侵入夕刻まで撃ち通しの末一部火災を生じたる処ありしかし夕刻までに止め被害は最小限度に喰止めたと報じた義は途中で引返し帰宅筑波線内で敵機の急降下に会い乗客は皆腰かけの下へもぐり込んだと云ふ恐ろしかったと云っていた

二月二十六日

空襲の為か雪の為か停電で五時半も六時半も報道を聞かれず空襲の模様更に不明明日の川尻の婚礼に出席の為進物の用意をする役場の村常会から帰った主人が至急常会開催席上一同に語るところを聞く話は八種目だったとその内重大なことは敵が本土上陸の場合に供へる為の大工事である三年間位要する工事を三ヶ月では非でも仕上げる仕事でその内容も場所も話す理にゆかぬが行って仕事を始めればわかる察するに多分要塞を築く仕事では無いかと思ふ鹿島灘へ上陸されたらどこかへ非難せねばならぬ常日頃から必需品は何時でも持ち出せる様にしておく様主人より言はれた実に何とも云へぬ気持だ毎夜の事ながら三四回警報が鳴った

二月二十八日 晴

今朝は春子美智子の廠行主人の川尻行と落着かぬ午前を過した一番も二番も出ない筑波線は三番で任三郎に上京を頼み置いたが切符が買へたかどうか間も無く帰って来て折りよく五反田往復買へて明さんと同道で出かけたお米七升浅漬カラシ漬をリュックサックに詰めて重い様だったが嫌な顔もせず行った武さん宅の壕堀仕事を止しての上京何を頼んでもどんな都合しても引受けてくれる我家にとつて無くてはならぬ中じくであるラヂオ放送で聞いた重要品の土下埋めはよい考えだ主人は非難の場合リュックに入れて背負って出る様云って居るが埋めた方が安全に思ふ相談して穴を作る事にした

三月三日

床の中で雨の音を聞き勇の登校のため門をひらく音沓の音を聞く修業にはなるが朝早いので辛からうと思つた旧二十日正月女中午後から宿下りの管徴用令を受けた女中の事何時行かねばならぬか分からぬはじめの女中無しで暮すことになるだろう決戦下却つて緊張してよからう只少し働くと手の痛みが困るヒ島硫黄島の報道を聞く度に胸が痛いすり鉢山の戦いに敵が何トンの鉄量をつき込んでビクともしない皇国に業をにやし戦車で壕の五六間近くまで来て壕の入口を打ち砕き埋めてしまひ上から作穴機で穴をあけ火焰放射器で黄リンを燃やし皇軍兵士をいぶし戦術により殺さうと計つた皇軍は必死の努力で五六ヶ所穴をあけ飛出して手島飛行場に侵入爆破切込の大戦果をあげ我本隊に合したと報じた

(註一) 土浦一高 (註二) 奉公人が親もとへ帰ること

三月四日 曇天

昨日一枚脱ぎたい程の温かさが今日は又急に寒い七時四十分頃B29の来襲を報じた上町常会一日松根堀の日で主人を始め一日村の小山へ出かけた炬燵で日誌を記き始めた微かな爆音を聞いたと思ふ間も無く地震の様な戸障子をゆする音烈しく続く驚いて土蔵を開き孫三人と共に非難した続いて五六回同じ音を聞くB29少教機三回に侵入十時半頃警報解除になったが一部火災を生じた処あり軍官民協力消火に努めつゝありと報じた多分京浜地区かとも思はれる空は曇天から雪降りとなる濡れて帰った主人の咄に松根八十貫掘った由

(註一) 戦局不利でガソリン不足の為松の根を乾して油をとりガソリンに混ぜて増量した

三月九日 晴

寒いこと真冬の様だよいよ女中も工場へ行く様令が来たこの十二日から勤める事となり荷物も持つて行った母親連れで来て寝巻の無心を云はれ今迄着て居た物を恵んでやりチョッキも作つてやった余にもみぢめな様で気

の毒になり我まゝ者ながら場合が違ふので一切を忘れて恵んだ

三月十二日

昨夜終列車で帰った美智子の咄に九日夜の帝都の空襲は震災以上の被害で焼死者の数も驚く計り浅草観音堂も国技館も焼失大東京の三分の一は灰になつたと云ふ赤い車体の電報配達が往来し被害の様子も察しかねる夕方五時発列車で勇美智子帰る罹災者の為増発されたと云ふ強風にあほり付けられ皇室主馬寮も御被害の由本所深川浅草神田下谷などは全滅の噂新次郎の身辺如何かと案じ速達便で問合せた塚田鉄之助氏の妻の咄に十七才にて女中に出たい者有りと言ひあり耳よりの話と知人に本人の様子を聞くべく館へ急いだ宛に角頼みたいとお願いして来た夜食事の折主人がおさくが早起きで体が堪らない余程気を付けぬ事には命が堪らないと云ひ出したのを聞いてはつとした

(註一) 東京大空襲

三月十三日

旧晦日正月夜は兵隊が入浴に来る日赤飯を作つて夜を待つ夜になり兵士二人で来た赤飯の馳走に芋餅を焼き持たせてあげた大分嬉し気に八時過帰つた美智子今日も五時発ので帰宅罹災者の話でもちきり聞く人耳を澄ます森次下館より商品と共に住子の夜具を運んで来た神郡は危険だと聞いたが焼けたらそれまでの事として送つたと簡単な手紙

三月十四日 曇天

朝四時半床の中で孫たちの出かける物音を聞く一羽二十五円と聞く鶏一羽分誰かにしてやられた残念な事をした旧二月の初午赤飯を炊く午后住子に返事を記き夕食の支度にかゝる思いがけぬ女中の世話が有り今日仲人の大工鉄さんに連れられて母親と共に来た十七才はるよと云ふ丈夫気な野方むき出しの純な娘だ敵の空襲もいよいよ本格的となつたと報じて居る九日夜

16

の帝都をはじめ十一日夜の名古屋十三日の大阪と何れもB29百三十機で来襲五十キロ焼夷弾を投下敵に多大の損害を与へたが被害の程度も生やさしいものでは無いと報じて居る

三月十五日 小雨模様

降るとも無く嫌な日だ女中の母親一泊して帰るはるよも仲人の家を尋ねる様云つて母と共にやつたがしくしくやつてしまつたらしい初めての奉公さもあるう出来るだけ面当見ねば居付かれぬかも知れぬ管間の郡道橋集合で今日各戸一人つゝ人足の割当あり主人は信用組合へ県からの調べ出張があり人夫に出られず代人も頼み付かず割当実行出来なくなる荘吾さん妻子連れで来た由新の様子を聞きにやつた会社も住宅も焼けないと聞き安心した主人組合より帰り咄を聞くに新次郎の会社々々長渡辺四郎一家五人焼死と云ふ各方面の咄を聞くに何れも爆撃の被害でなく火災の為命を落としたらしい敵が帝都へまいたピラに又十五日頃参りますよしくと云ふ意味が記いてあつた由泣きたい様に口惜しい敵は近く本土上陸をするらしい敵が身辺近く迫る場合を考え目つぶしの練習をしておく必要ありと考へた実験せねば急場の用に足るまい灰トウガラシ粉小砂利などまぜて用ひたらどうかと思ふ

(註一) 筑波の西 (註二) 相手の目に投げつけて見えなくさせる物

三月十六日 春風

床の中で第一回の放送を聞く硫黄島の戦況敵は新たに総反撃を始め各所に有力な火焰自動車迫撃砲を以つて攻撃して来た又海上に多数の上陸船が近づきつゝあると報じたもはや硫黄島も守り切れず全員玉砕の日が来ると思はねばならぬその次に来るものは何か艦載機の爆撃から本土上陸となるだろう万一筑波下に敵が来る様な時は殺さるゝ前に一人でも敵を殺してから死にたいトウガラシ灰砂を混合した目つぶしを作り敵の顔へたゞき付け目つぶしをかけておけば女だつて出来るうまく顔に当たればよいが外れたら殺されてしまう目標を作つて練習の必要がある

四月六日 晴

昨夜小磯内閣総辞職を報じ後続内閣鈴木勘太郎大將に大命降下を聞き午後三時の報道にソ連が日ソ中立條約を延長しない旨モロトフより日本大使に通告ありとの由日本はソ連の敵たる独逸を援助しソ連と同盟国たる英米と戦つて居る中立條約当時とは国情が大いに違つて居ると報じた四月二十五日以降は中立を守らぬ事になるが兎に角向こふ一ヶ年後に條約無効となるわけですれ迄に何とかなるかどうか

四月十四日 晴

米大統領ルーズベルトが急死した報道を思ひもかけず聞いて胸がすく様だ米国民の慌てた様子が目に見ゆる様だ

四月十八日 晴

朝から大風呂敷を背負つた婦人が通る空襲の罹災者らしいラヂオ報道で沖繩の戦今一息と云つて居る航空機の生産次第で必勝の神機を掴む事が出来る鉄の増産必至を要望されて居る海陸の特攻隊により勝ち抜ける事を思ふと飛行兵を神様とも思はれるニューギニヤの北端飛行場を皇軍が占領確保した事を報じて居るが正巳の身辺知る由も無い

四月十九日

上町婦人会一同で出征兵士の武運長久を祈願しに蚕影神社から鬼子母神社へ行く当日軍部の人夫割当があり婦人の人夫多く出勤の為参拝人はほぼ半数だった二十日余りも風邪気味の為か今日は疲れたが正后少し過帰宅教子の昼寝の傍に体を休めて居た女中も人夫に出て居る蒔割もせねば太いまゝで炊かれる気を取り直して蒔割をするやれば出来る毎日常勤の春子たちの咄も面白く今日も無事に過した

(註) 養蚕振興を願う神社。木花咲耶姫、金色姫

18

四月二十一日

森次が防空壕掘を始めた鶏小屋の前に掘つたのは方位が悪いので埋めてしまつたまさの便りに大洋へ爆弾落下〇〇〇の家は爆風でめちやめちやになりその上火を発し全焼したが家族六人壕の中で無事だったとの知らせに驚き早速見舞の手紙に金二十円を添へて送つた壕の必要をしみぐと感ずる目下国民の誰もが戦争の為にのみ働いて居るのがはつきりして来た商店は配給店以外は全部廃業同様農家も食糧わけでも甘藷チャガ芋の増産には軍部から農兵が出動して実地作業に当り常会で松根堀軍への人夫婦人会も折々農兵から出動を依頼される初等科生以外の生徒は全部産業か軍工に働く事となり学校へ入らぬ子供と七十才以上の老人だけが呑気に居るだけとなつた本当の総力戦だ物価の高くなつたのも驚く計りで玉子一ヶ七十銭が普通葱一貫目二円五十銭ゴボ一貫目四円甘藷一貫目七円と云ふ鶏一羽三十五円牛肉は百匁五円美食を欲したら財産も何も吹飛んでまう世相となつた

五月七日 晴

十五日間日誌を休んだこの間ルーズベルトの急死ムツソリーの伊太利反乱軍の為に殺害の報ヒットラーの自殺などめまぐるしくも重大な出来事を報じて居る鈴木首相の放送も日本がいよいよ困難な立場になつた事を報じた続いてドイツの降伏が報ぜられる日独伊三国間の約束を破つて独逸が単独和を申入れた事をしきりにラヂオが報じて居るヒットラー亡き後の軍政は日本を無視して居ると政府当局がそのやり方を非難して居る今後日本はどうなるか実に不安の上も無い一家あげての疎開とか横穴を掘つて避難の用意とか東京から新次郎も来ていろいろ話が出たがさて実行とまでは未だ情勢が行つて居ないので主人も義も気のりせぬ正巳もどうしたやら手紙を出してもどうせ届かない途中で焼き捨てられてしまふのかと思つともう出す気もしない四月に宇都宮から俸給が届く筈だが来なかつた彼の身に万一の事でも有つたのか大阪の三菱社からは勤めもせぬに増俸の通知が来たがこの進級の通知は正巳の無事を意味するものとは考えられない

(註) 空襲などに備えて都市住民が地方へ引越す事

五月八日 晴

朝からしきりに敵の空襲を報じて居るB29機が各方面を飛んで居るらしく房総半島から霞ヶ浦方面へうるさく飛来する上陸の為の偵察かも知れぬ新聞を見ると米英両国がドイツと戦つて兵員武器などを日本へ向け発進したと報じて居る又ドイツから開放された艦船も多数有るらしく佛伊その他の国々からも船舶を集めて日本へ向ふらしくこの重大戦局を乗り切らねば日本国の存立が出来なくなる運命の決するところだが普通に考えたら勝算は無い只大和魂の働きできつと最後は勝つとそれ計り頼りにして考えて居る沖繩戦況の報道も一進一退と聞き呼吸つまる思ひがする特攻隊が無かつたら敗戦となつたかも知れぬこの戦も特攻隊による戦果は実に素晴らしい陸上切込隊も又目ざましい共に日本人以外には出来ない戦術だと云つて居る

五月十二日 雨

役場に警備隊本部の札が掲げられ少尉と軍曹が勤務についたさうだが竹槍部隊も手りゅう弾投げ火焰ビン投げの練習をする事に村長から云ひ渡されたと云ふ常会の役員会開催軍の工夫に出ない人々をどうするか相談で出不足に対して一日三円の割で出して貰ふ事に決定各班二人づゝ集金に出たが一班二班は全部納金済みとなり三班だけが残つた由

五月十四日 晴

朝から畑で主人と共に働く天高く筑波山を頂く気持の良さ野で働く楽しさに戸外で過す日が多くなつた又敵機の襲来をサイレン鐘で報じて居る館前の持山馬頭観音へ兵士の家が建つたと聞くあれから山麓を平沢までトンネルにするとか種々噂がある北条もナガセ山の麓から工事に着手したとか容易ならぬ事態になつた万一避難命令でも出たらどこへ逃げるか問題で主人は六所のお宝山がよいと云ふ大きな石の側に穴を作つたらよい避難所になるとの事は非見に行きたいと思ふ今日もラチオが沖繩の敵総反攻を報じて居る又九州へ小型機九百機名古屋へB29四百機来襲南鮮から台湾と至ると

20

ころへ飛来して居る

五月十五日

公休日春子は廠を休む庭師が来て松の手入れを始めた春子と二人で館の兵舎を見たりお宝山の避難所を見たり山遊びを兼ねて行く事となり弁当持参で出かけた余り遠くもなく山とは云へすぐ近くで昔の武人が宝でも埋めて置いたかと思はれるまん丸い小さい山で入口に大きな宕石が海軍御用石島石材所と書いた立札が有り馬車道が開けて居て村の馬車夫が石材を運んで居た主人の云つて居た岩陰に穴を作つたら理想的だ穴でなく只の小屋作りでもよいと思つたこんな処はたとへ敵が侵入しても見付かる気遣いは無いと思つた万一の時はこゝへと思ふと安心して居られる百合の根は見当らず下りて館の増さん宅に寄り茶の馳走になり館山に登り百合根堀をする小雨が降つたり止んだりの空模様でも石の上に立つて四方を眺めると何となしに心が開けてよい弁当を平らげて高山植物二本百合三十本程持つて帰途館の持山馬頭観音へ来て見れば兵士が昼の休みらしく松の根に腰を下ろして休んで居る土を高く盛上げた様子を見るに穴掘の様だ茨城県は戦場になるとの噂の地軍の工事を見る毎に不安になる

五月十六日 雨

今日は春子も美智子も廠を休んだラチオでアルミ貨の引換をしきりに要望して居るが協力しようとする人は余り無いらしく自分で上町常会だけでも戸別歩いてみよう小さな奉公でも幾分なり協力してみたいまだまだ国に尽すと云ふ心が足りない実を云へば止むを得ず命によつてするのみで自発的にはない機が到来しないのかも知れないが・・・軍工事に人夫に出ない人をどう扱ふかに付先日役員会を開き相談の結果一人三円づゝ徴収する事となり各班二人づゝで集めたが不満も無く集まつた中には相変わらず難物が居て警察でも何でも向けて貰ほうと云つて居た由やと半価の一日一円五十銭で了承して来たとは老年の二人に気の毒でもあり又国の為止むを

得まいとも思った

五月十七日 曇天

今朝沖繩の戦況を聞くに大分不利の立場になった事を報じて居る万一敗けたらどうなるか飛行機が足らぬ為と聞いてちっとして居られぬ気持になり筑波神社へ一銭貨兩替に行き七十円程引換えて来たこの内ニツケル貨を選び出して今の通貨の小さい一銭を残して銀行へ持参すれば五銭十銭の紙幣と引換出来る夕刻役場より来て今晚と明晩兵士の宿泊を頼むと帰った間も無く準尉と一等兵の二人が来た兵士が何より楽しみな御馳走が無くウドの玉子とじときんぴらで夕食を上げた

五月十九日 曇天

キリツとした面ざしで優しい様子の準尉一等兵との仲も四角張らず和やからしい今朝も玉子料理の外無く焼いて上げた鬼子母神社の御縁日参拜に行ってお釈迦様で大分賑はった帰り牛肉を求めて来て中食に肉鍋午後パン作り夕食カツレツの献立で兵隊も大喜びだった

五月二十日 雨晴

兵士は八時出発の予定で六時過起床今朝は赤飯を作って馳走した玉子を茹でてあげたら笑をたゝへて札をのべポケットに納めて自転車へ荷物をうんと積み山東のツキオカへ行くとして出かけた北条大池へ出て登るとの事あの道を自転車をこるばして登るのも骨の折れる仕事だろう正巳・・・少しく忘れかけて居た正巳を思ひ起し勇ましくもりゝしい正巳の尉官姿を一目見たく主人に話したらこれも笑って居たが逢ひたい心は隠し切れずに顔に現われた南無八百よろずの神々様何卒日本が最後の勝利を得られます様

に・・・と心の中で掌を合せる役場から今晚も二人だけ兵士の宿を頼むと申込まれた將校二人との事引受けたので又客間の掃除茶菓の心配五時頃になり一人来て後から又一人来る二人とも少尉で正巳と同じ位の年に見え

22

る満州方面に五年活躍久々で内地の山川を見る事が出来るどこを見ても楽しくなつかしく故郷を思ひ両親を思ふと逢いたくなるが今度の帰国は夢の様でどこへ行く船か知らずに乗ったが着いて驚いた本土が重大化した為の大部隊の帰国らしい

五月二十四日 晴

今暁ラヂオの警報音を聞きスイッチを入れた大分大編隊で来たらしく撃墜十何機とか云って居る正後の報道にB29二百五十機来襲帝都及び名古屋を襲った何れも焼夷弾攻撃により火災を生じ宮城内お茶屋及び赤坂御殿消防器置場一棟焼失他は夜明けまでに大体鎮火したと報じた池上線不通も報じて居たから新次郎も今度は焼かれたかも知れない

五月二十五日 晴

昨夜村常会での話に六十五才迄の男子及び国民学校初等科を除く男子全部女は四十五才以下国民学校初等生以外全部が国民義勇隊となり活躍する事となり二十八日朝六時に蚕影神社で結成式挙行と決定今晚七時に常会を開く事となった草履一足玉子二個の供出は全部完納鶏の無い家では買って納めたのを聞くに一個一円つゝとは驚く外無い思ひがけなく新次郎昨夜帰った

五月二十六日 晴

昨夜帰った新次郎の咄に池上全線の各駅ホーム影も無く昔の武蔵野の原を思はせると云ふ昨夜常会の後空襲警報あり続いている情報によると京浜地区にB29二百数十機来襲焼夷弾により攻撃をなし火災発生とのことなので新が屋上の上つて見て居る表の通りも人声があるので出て見れば各戸総出の有様東京と思はれる空は赤く時折煙火のようにパツパツと明るくなり丸い火の玉が連続的に三つ位つゝ見える只ならぬ様子に胸を突かれる夜一時迄情報を聞きながら床に入りかねて居た子供らも皆起きてしまった

23

五月二十七日 晴雨

今日一日畑へ奉仕と心に決め朝食後すぐ田甫に出た空は碧く見渡す限り若緑の美しさに心を奪われた作谷飛行場の兵士が来て荘を借りたいと申し入れられ煙草倉を御用に立つるべく約束して昨日は武井さんへ荷が入った今日は宅かど心待ちしたが来ず予科練らしい二人の兵士が買物に来て新聞を見ながらシヤクだなと一人言を云って居るお茶をすゝめたがこの人達も空腹を辛抱して働く人達かと思ふと温かいおにぎりでも作って食べさせたいと思った

五月二十八日

朝から雲一つ無い上天気五時四十分義勇隊の結団式と必勝祈願に各戸一人つゝ蚕影神社に参集朝からちーと警報の前ぶれと共に敵の来襲を報じて居るB 29に誘導されてP 51三十機が各所に来襲土浦南方に行動と再度報じて居る間も無く土蔵の屋上方面から南方に行くP 51十機位見られた四時過帰った美智子の咄に航空廠に来襲工場上空で空中戦となり総員待避用意の令を聞くと同時に敵機が上空に現われ壕に入る間が無く万力台の下に首を突込んだがお尻が出て居てもうにもならなかったと笑って居たが頭上で空中戦を見ては小型機だけに壕に入りたかつたらう

五月二十九日 曇天

七時からちーの前ぶれと共にB 29一機の来襲を報じて居る二見屋の昌子さんは一昨夜焼け出されて帰った由新次郎は来ないところを見ると焼けて居ないらしい咄によると二十六日夜の空襲は四月十五日のより焼死者が多いと聞き肌を粟を生ずる思ひ明治神宮への参道に合唱して座ったまゝ焼けて固くなっている者が有ったさうだ引切りなしの情報にB 29五百機P 51百機で主力を横浜と川崎から帝都に向け焼夷弾攻撃を行った事が知れた中食頃南方の空只ならず雷とも違ふ妙な色陽の光もさへ切られて桃色に見える空一面金茶色になり灰が降り始めたさては横浜の戦災によるものと知られた

24

何と云ふ口惜しい事だらう定めし焼死者も多からう

五月三十日 晴

今日は蚕影神社前山の軍工事の工夫が割当てられ女中が行った作谷飛行場へ通ずる軍用道路が出来らしく床屋を取り壊す様申渡しになるらしい飛行少尉が来て常会の意見を聞きたい村の様子も知れる様と語って居たが車屋善さんの庭を通ずる様見積書を作ったが少しでも曲がっては駄目だと上官の令で止むをえない事だった

六月一日 曇天風

七時少し過ぎ筑波神社へ参拝に行く野道には野バラが白く咲き乱れ何とも云へぬ香が鼻腔を打つ先月迄は橘国民学校の生徒が参道に出て縄跳鬼ごっこなどして賑やかだったが今日は一人も居らず旅館は戸を閉めて寂しかったこゝが危険地域になったので何処へか疎開したとの事沖繩の決戦も苛烈の度を増す計り義烈空挺部隊の敵飛行場へ強行着陸から神雷特攻隊の活躍と呼応して戦果は大きいが今のところ五分五分の戦力で飛行機の生産により勝敗を決する状態にあると報じて居るまさと住子から頼りが来た住子は正夫が幼稚園入りをして世話無くなった事を知らせてあるまさは相変わらず忙しい様子でブドー酒の配給に入れ物持参の人々が二三百人も並んでお話にならぬ忙しさだと又酒造の来年度見込みが立たずアルコール製造の軍事工場化する様子だとか義は岩瀬へ名古屋帯を買ひに行つた昼少し過ぎ帰つたが十本余りあるうか四十円から六十円以上の品これで鼻緒を作つて売る心算で商いも仕入は上手いが売方は下手だ客に対して頭が高くて困る

(註一) 貞次郎・うめの長女と次女

六月二日 雨

梅雨のような細雨に風も加はって嫌な日だ午后一時から学校を宿舍として居る兵隊さんが慰安会をするから来てくれる様にと常会へ通知の依頼に来

た百五人の兵隊さんの芸は面白からう女中とおさくを見にやった三時迄と聞いたが五時が過ぎても帰らぬ時でも割っておこうと始めたところへ女中は帰ったしばらくしておさくも帰る面白いの何のこんな面白い思ひをした事は無いと喜んで居た見物人は学校の廊下一杯の人手で見物人の中から飛び入りの芸人も出て大分賑はったとか兵隊さんも喜んだ事だろう

六月三日 晴

梅雨と思つた空は晴れ初夏の香が新緑の葉陰に匂ふ道を蚕影神社参拝に行く昨谷飛行場から兵隊の宿舎の疎開で館の前山に出来た急造の兵舎がポツリポツリと見え隠れする芝を屋上に貼つたところは機上から見ても分かるまいと思つた廠から帰つた美智子の咄に神雷特攻隊のロケット機はマルダイ工場苦心の製作に成つた物で今度沖繩で大戦果を上げたが実に喜びに堪へないと聞かせたさうで工員も学徒も勇み立ち努力を続けて居ると聞き心強く感じた

六月五日 晴

昨日修平氏の長男に入隊通知が来た召集と現役で二十一人夕方九人合計三十人の出動となると聞いたが沖繩の戦況を聞くと一時も早くと心が急ぐ正巳ももしかしたらニューギニヤから何処かへ出動したかも知れぬ武さんが来て甘藷植付が細か過ぎてまづ一尺五寸位間を置かぬ事には大きい物が出来ぬと注意に来て下されたと聞き早速行つて直して来たが小麦の穂で目を突いてしまった次第に痛みも出て来た突眼は恐ろしいと聞いて居るので土浦と思つたが午后三時過ぎては汽車も都合悪く水で浸して寝て居た夕刻新宅のおせいさんがわざわざ来て母乳を入れると快くなると入れて下されたおさだやおくらさんおせいさんの真心に限りなく感謝の念が湧いた

六月六日 晴

一番で土浦眼科医の診察を受け九時に帰る予定で中食持たずに行き福善で

形ばかりの洋皿一枚コーヒー一杯で済ませ帰る途中赤の忠助氏と同伴となり戦況を聞いたところによると沖繩はもう駄目だと云つて居た義利空挺部隊の苦忠も無になつたかと心が暗くなる

六月七日 雨

昨夜から大分快いように思つた目も起きればそうでも無くかなり痛い今日は休養したいが新々宅の武一郎さん明日入隊で今朝主人出発を見送りに行くおさくも新宅へ上簇の手伝いで女中一日中代理をして了つた釜屋さんが甘藷苗を持って来てくれたので降る中を植付に行つた農林一号とか云つて大分大きくなる農作物と聞いた主人よくよくぬれてボチャボチャだと笑ふ見れば私よりもまだまだひどいので共に笑つた

(註) 養蚕の一過程 絹糸をとる為の昆虫(蚕)を飼う事を蚕飼(こがひ)と言う。四月中旬蚕卵紙(種紙)から孵化したばかりの虫は毛が密生していて黒く、毛蚕(けこ)と呼ばれる。毛蚕を蚕卵紙から掃き取つて蚕座に移す事を掃立(はきたて)と言う。桑の葉をたべて大きくなるが一回脱皮をすると毛も無くなり白くなる。脱皮の前には蚕の眠りと言つて一日食物もとらずじつとして居るが、ふつう四眠四起して五センチ程に成長し、透明な蒼白色となつて繭を作る。一つ一つの眠りに固有の呼称があり、一眠一齡、五齡期が食い盛りで数人がつきまきり十日程の蚕ざかり、蚕時の番をする。掃立後二十九日で葉を束ねて作つた蚕のすだれに上らせ繭を作らせる。これを上簇(じょうぞく)と言う。病気の蚕は捨蚕(すてこ)と言い、捨ててしまう。

六月十日 晴

入梅と聞いただけでも暗くなる山はもう降り出したららしい白滝神社の御縁日へ地下足袋モンペ姿で行く帰る頃には雲も切れ陽の光も見られる様になつたもう行つて来たかと驚かれた今晩兵隊さんの風呂の番だと知らせが来た日曜で子供らも口淋しげなので両方分にとパンを作つた役場員の案内で兵士が日本刀を見せてくれと申込んで来た先祖から伝はつた品だがサヤは割れて居る十八才位の子供の使ふのに丁度よいとの事で拝借して参りますと持つて行つた敵軍上陸の折使用すると云つて居た義勇軍として召集さ

れた国民と自分らと混つて戦ふ事になるでせうと笑つて居た夜は先夜来た兵士の分六人都合十一人パン油培り豆香の物でお茶を上げた一同喜んで語り平らげて八時半帰る

(註一)地面を歩くために裏底にゴムを貼った足袋
(註二)戦時中の婦人の標準着で下半身に履く衣服

六月十一日 曇天

今朝の新聞に見る様な場面が何時来るかと思ふと呑気で居られぬ敵は背が高いから切るより突くのが利方で背後から突くのが一番だ腹の辺を突くがよく又丸をけるもよしトビクチデバナタ竹槍など有合はせた品を持つ事鎌もよしと何れも使用法まで記いてある身の引きしまる感あり夕方兵が三人買物に来て空腹で堪らぬ玉子でもおにぎりでもと云はれ早速作り始めたから時間が無いとか知らぬ間に行つてしまつた血気旺盛な若者が空腹で人に食物を乞ふるまでは定めし余程の事だらう食べさせて上げたかつた

六月十三日 曇天

新宅へ繭掻きの手伝いに朝から行つた一日中語りながら面白く過ごし中食など馳走になり面映かつた来た人たちの咄に日立の爆撃がひどく死傷者一万人を超えるとかあゝ嫌だ嫌だ村内も又召集が来た武井の為ちゃん白井の鮭川賢太郎氏の長男何も思ふまいとしても頭の中は何時でも物憂い思ひで一杯今年食糧が極度に不足する見込で今から出来るだけの方法を考慮して居るおさくは子供たちの非難袋を作つた

六月十九日 曇天

うすら寒い秋口のやうな何となくうら寂しい日元気な主人は竹林の垣根作りに出かけた今日は昨日より少し元気になれたので着荒して用に足りざるセルを標準着に仕立てたくハギハギハギハギで始めた夕方までにやつとモンペだけ物になった男が学徒として航空廠(予科練)への入廠式で着る特

大の作業服を貰つて来てチャンチャン坊の様に手が出ないで大笑いだった

(註一)半端な布切れを縫ぎ合わすこと (註二)ちゃんちゃんこを着た坊や

六月二十三日

朝から情報が入つたB29機の偵察らしい解除後十五分まで又警報次々と入る情報に51五十機霞ヶ浦方面に行動筑波山附近を旋回中と報じたと同時に頭上で烈しく撃合ふ機銃の音に肝をつぶした母屋より店がよいと計り夜具を持って店へ住子来皆で頭から被つて息を殺して居た十分位も過ぎた頃次第に音が遠ざかつたのでほつとして夜具の下から顔を見合はせて笑つたおさくと主人は奥に居て平然たるものだった廠から帰る孫たちを待ちあぐみ幾度か外へ出てみた常より大分遅れて帰つた孫たちに様子を聞くに何事も無かつた義も春子の件で出浦子供と一緒に帰宅したが道側の待避壕に三十分も入つて来たとの由今後増々頻繁となる空襲に食糧衣類重要品など用意して置かぬといざの場合間に合はぬ今日は壕に入る間も無かつたのでつくづく考えた

六月二十七日 晴

沖縄の戦もいよいよ全員総攻撃敵中に突入の無電が入りそれ以来音信が断たれたと報じて居る然し沖縄の敵艦船に皇軍はまだまだ烈しい戦闘を繰り返して居るらしい下館の宮田の長男もいよいよ戦死かと思はれる千葉医専を卒業して軍医として出征沖縄に居る事が知れて居るので不安は増す計り昼夜を分たぬ空襲や偵察に本土上陸も近づいた事が分かるラヂオも新聞もこゝ数日が注目すべき時だと報じて居る

六月二十九日 晴

午后から女中と畑に出た汗を流して働き涼しい風を全身に受ける気持ちよさ働いて初めてこの快感を知る天は高く山並は緑の色も濃くふつくりと膨らんで見える背丈まで伸びる様な気がする終へて帰れば五時を報じた新

七月五日 雨

ヂヤガでお茶をのみ今日も無事に終へんとして居る六時頃主人帰る宮田では諦めて居ると云つて居たさうだが親の心中察するに余りある今度から老人以外の男は家庭に居なくなるらしい沖繩の手島中將戦死の報が敵側発表によって知られた軍服の上から腹十文字に切り介錯によって首ははねられて居たと古武士そのまゝの立派な最期だったと――

六月三十日 雨

夜半から降り出した雨は農家にとって大喜びだろう武井明氏入営まだ床に居るところへ迎えを受けて見送りに行き御馳走になる

七月三日 曇天

昼夜の別無く敵機が来襲する房総半島銚子九十九里浜鹿島灘の偵察は烈しい様だ茨城県がやがて戦場になる事は必至と考えられる中島中將と参謀長の戦死の発表を聞いた某氏は食指をぷつぷつ切つて三宝へのせ血のしたゝるまゝ神棚へ供へ二人の手向とした既に早く死を決して居た兩將軍は某氏の嘆願を入れず沖繩を退去せしめたので某氏のやりきれない心が斯くさせたと新聞を読む主人の声を聞いて胸を打たれた

七月四日

小雨降る中を南瓜蔓の手だしをする雨が多い為か実が着かぬ正后頃空襲警報と共にP51が頭上を通過今日も国松辺の上空で撃合ふらしい音がする第四編隊まで来襲したと報じて居る夕方廠帰りの孫たちの咄によれば霞ヶ浦本廠が被害を受けた外市中は何事も無かつたと云ふ夜十二時頃新次郎帰る機関車が故障で出られなかった由随分勤めも骨が折れる疲労の為か熱が有るこれではやつぱりやり切れぬかも知れぬ深谷神立間も自転車に乗れぬ悪路の由結局北条から通ふのが一番よい様だと云ふ事になり煙草販売所に住んで通ふが上策だと主人にその方の心配を願ふ事となつた

(註一) 霞ヶ浦の阿見にある海軍航空廠

七月五日 雨

昼過頃P51八十機本土に来襲三四十機が霞ヶ浦方面より筑波地方に行動今日も国松(註一)もしくは少し遠いかの辺で盛んに撃合う音がする国民学校生徒は敵機が頭上通過の時に駆足で帰るもつと早く帰さぬ事には間に合はぬと案じられた

(註一) 筑波山裾西旧筑波駅周辺

七月九日 曇天

朝食前から情報が入る又々敵機の来襲たかをくくつて畑へ草とりに出かけた道で二見屋のまささんに逢ひ立つたまゝ語る内頭上で烈しい機銃の撃合ふ音十機位で国松上空から黒子飛行場方面を通過した間もなく反転して行過ぎた飛行場を探して居る様に見えたが味方機四機が物凄く早さで追撃して来た呑気に見て居てもしてはと逃げ帰つた孫たちと蔵に入つて様子を見る内音も遠ざかつたのでほつとして静かになつたのを見計つて畑に出た軍沓の音聞こゆる白井の方を見ると五六十人の兵士が戦闘姿もりゝしく駆け足で通る三人の上官らしい兵が口を開いては駄目だ二回続けて呼吸しろ一、二、一、二と倒れさうな部下を励ましながら一本松(註一)は未だ遠いですかと聞きながら過ぎた何かしら目頭が熱くなつた

(註一) 北条方面と大池方面の別れ道の三叉路の所

七月十日 曇天

北条へ女中を使ひに出したが空襲となり途中から逃げ帰つた今日は茨城県が目標らしく鹿島灘から房総館山を結ぶ線に添つて侵入して来たB29の案内でP51を主として聞き馴れないのも入つて居る様だ阿見の辺りで盛んに高射砲の音がする花のような炸裂の煙がポツポツ空に浮び上つた間近で爆弾の音らしい凄く響きも二回聞いた壕に入るにも蔵へ行くにも頭上でそんな音を聞いてはどうする事も出来ず只うろろする計りだった午后四時過まで連続空襲で神経も疲れた廠から帰つた美智子勇の咄に廠の建物は全部

破損したが中は空だから障りは無いと云って居るロケット爆弾の破片を拾って来たが百メートル上からこれに当たったら即死だと思った

七月十八日

主人が配給になった刻んだまゝの煙草を巻いている立派な巻莖が出来たこの国難に老年の女には御奉公の道が無いせめて手近なアルミ貨の引換上町だけ戸別に廻った前よりは少ないが皆無ではない途中の道で空襲警報と共に敵味方の撃合ふ烈しい音がする高角砲か爆弾か凄じ響きにはっとして勧められるまゝに壕に入り音の遠ざかるを待つて帰った昨日は水戸日立が艦砲射撃をせられ夜は土浦駅が襲はれたとか刻々近づく決戦場に今後を案じる闇夜で巨額の金を得て喜ぶ悪魔の多いのに悲しくなる

七月二十日 小雨

昨夜の空襲は日立水戸多賀高萩豊浦で何れも焼夷弾攻撃と報じた日渡家の安否も気遣はれたが電信電話とも不通止むなく大曾根のサイドカーをお借りする事にして明日主人が行く事となった日立から来た人に様子を聞くことができた川尻も大体焼けたが少しの場所が焼け残りその中に日渡家も残って居るとの由東介さんはどうしたかまさも五人の子を連れて非難は定めしひどかろう一同無事かどうか案じられる

七月二十一日 小雨

昨夜兵士二人来て今晚二十四時頃百二十人と馬八頭山越しに来るので宿泊を頼むと云ふ主人急いで宿探しに出たあとへ隊長入浴に来る夜中迄兵隊を待ちくたびれたがとうとう来なかった今朝六時頃主人は堀井のサイドカーで川尻へ行った赤飯を作つて二重ね外に中食分一重チャガ芋下駄草履を持参昨夜来る筈の兵隊朝になって到着家へ將校二名兵士二名の休息所として頼まれた中尉と少尉上等兵と一等兵の順に朝食をとり入浴の用意出来るまで床に入り中食後二時頃雨の中を大村に向つて出発した夜に入り強風と大

雨まるで暴風雨美智子勇は七時半頃帰宅した

七月二十二日 晴

主人の留守で子供は日曜日皆で隠居に来て居る政府はインフレ対策をどうするか問題らしい白米一俵千円で買ふ人も有ると云ふ始末五時頃大曾根の運転手帰る主人は多分孫たちを連れて明日来るらしいと先ず洋服やら衣類をブリキ箱に二個分洋服箱に四、五箱分二人分の食料として米一俵先日手紙で頼んだ塩十貫目サバ節等届いた幸にも日渡本新宅無事だった由夕食済まし運転手は帰る

七月二十三日 小雨

曇天なれど降らぬ間にとチャガ芋掘に行く折悪しく降り出して逃げ帰る又行って又逃げてとうとう中止となる午後主人洋一と郁子を連れて帰る川尻の咄を聞いて泪無しには居られなかったこれが生き地獄と云ふんでせうかと云つて居たとか急に不安な気持になつて疎開の決心をする二人は安全地帯に着いて安心したか喜々として元氣一杯子供達と大はしやぎ夜は隠居へ寝せようと思つたが嫌な様でとうとう大勢で一つ蚊帳へ入り込んだ

七月二十四日 曇天

おさくと女中と共にチャガ芋掘に行く育ちは良いが数が少ない昼近くに主人が見に来てこんな様ではお姫様のやり方で駄目だ駄目だとけなされてしまった馴れないので骨ばかり折れたが主人も一緒に堀り全部終えて帰つて小屋にひろげたところは百貫目はあるかと思はれた

七月二十五日 晴

久しぶりの快晴で嬉しいけれど肌寒い土用入り五日目の陽気にしては案じられる降り続いた為チャガ芋がどろんこになり腐つたら困ると主人が土落

八月一日

としを始めた女中おさく洋一まで交へて四人で落したこんな事は生まれて始めてだと笑ったぢーと情報が入る度こりこりして居るので洋一は流石に不安な顔をする郁子は不恰好なモンペをはいて居たので早速古物の布で春子を作ってくれて恰好よくなった

七月二十六日 晴

朝から情報が入った国民学校生徒は皆駆け足で帰った昨日大麦小麦の供出について会合有り主人出席自転車供出が田井村で十台とか家でも一台出さねばなるまいニュームの弁当箱も供出との事勝つ為には何でも出さう

七月二十七日 晴

兎と鶏の餌をやり床掃除を済ませて畑に出て汗を流した洋一と郁子は手持無沙汰気になったり柱によりかゝったり皆の帰りを待ちわびて居る様子野に出れば空は高いし山並を見たゞけでも気が晴れて持病の頭痛も忘れてしまう働いた快地よさが長命の源だろう茄子隠元の草とり土寄せに主人と汗を流して居るところへ二見屋のまささん姉さん被りで畑越に胡瓜を二本持ち食べよと云ふ皮が軟らかく美味しい瓜だからと親切に云はれるまゝに二人で一本づゝ食べて了った道行く人が主人が瓜をかざる様を見てあゝそんな物食べる様になりましたかと笑って居た毎日見て居る私でさえそう思ったから無理もない今日一日楽しく暮せた

七月二十八日 晴

主人はバラバラで配給になった苜を巻いて居る毎日吸ふ分だけ作って居る昨日八郷の吉生の姉さんから来た手紙によれば彰さんの外寛さんと長男次男の四人が出征中との由国家の為名譽この上も無い事ながら苦勞も四倍せねばならぬ

(註一) 筑波東の八郷町の吉生から主人貞次郎は桜井家に婿入りした

八月一日

今日主人が伝達当番のところ夜に入り寝に就かうとしたら警報が出た早速役場に詰めたが大空襲でのべ六百機の来襲雨戸を開けて敦子にも支度をさせ自分もモンペをはき蚊帳の中に座って情報を聞く鶴見川崎は爆弾攻撃水戸長岡八王子方面は焼夷弾攻撃を受けたと報じた東の空に電光の様な光を見る帝都第二回空襲の時と同じ様に思はれた明方三時までうち通しの攻撃意外な損害を受けたらしいマンダリともせず夜を明かした

八月四日 晴

空襲時を案じてガラス戸を全部廊下上の明り窓まで取り払ったのを見た主人が火の予防に困ると云ふので又全部嵌め込んだ何れがよいか迷うところだ洋一は感心な子だ毎朝必ず道路を掃き清める家の子は誰も遊んで居る中を働くので近所の人まで目にとめてほめてくれる

八月八日 晴

午后空襲警報あり今朝の報道に落下傘式爆弾を報じて居たがこれが来たら壕に入るより外ないと思つた中天で爆発して人の命をとる事が目的の爆弾だと云ふ六所に設けた電波探知機が敵に知られたらしいと聞いては不安が一層増加した

(註一) 原子爆弾

八月九日 晴

早起きして草刈をする女中と共に午前中二かごは刈ったが干草用で草を選ぶので仲々手間取る中食後は出る気になれず洗濯をする痛いと思つた手は増々痛い一夜過ぎれば治ると高をくゝって働いたが堪へられぬ程痛む午後五時の報道にソ連が満州国に越境侵入攻撃して少数機が北満北鮮に飛来したと報じた主人始め一同驚き呆れ且つ不安頂点に達した何としても勝てさ

うに無い大本營発表によれば七月二十六日米英が日本に対し無条件降伏の勧告をした日本側が拒絶したのに対しソ連が中間に立ち和解の労をとったが応じないので武力に出たらしい戦争も本年中に終結だと主人が云って居るとんでも無い戦争をしたことになった

八月十三日 晴

夕刻水戸連隊の將校五人二泊の依頼を受けたので準備をする予定時刻に三人あとから二人都合五人(大佐司令部の參謀大尉少尉曹長)六時半に夕食を終え学校へ行く切込の練習やら軍作成の演習をするとか九時迄かゝり帰宅後入浴役場に駐屯して居る將校よりお酒が届き十二時迄のんで床に入る本土決戦も間近に迫ったとか何とかして最後に勝利が得られる様勝つ為には何もかも辛抱して来たがソ連の參戰や広島への落下傘式爆弾には少なからず驚かされた様子

八月十四日 晴

五人の將兵は学校へ出かけた中食持参で又夜帰って酒宴の肴も作らねばならぬが何も無くて困って居ると夜に入り酒二本肴一皿届いた一同五時に帰り入浴食事して又例の通り出かけた九時頃帰り警報やがて空襲さあ暗い暗い手さぐり足さぐり主人と二人で後始末して床に入る間も無く小型機の来襲一時間半位間断なし十二時過着物を着せ自分も仕度をし春子を起こした

八月十五日 晴

正後に重大報道がある国民一人残らず聞く様にと再三再四の報道に一同ラヂオの前に座って放送を待つ上御一人の御声にて国民に放送さるゝのを耳を澄まして聞き入った意外外米英支ソの四ヶ国に対して降伏をした報道が続いた——あゝあゝ何と云ふ口惜しい事だらう泣かずには居られぬ何と云ふ残念な事だらう折角こゝまで戦ひ抜いて来たものを飛行機も随分出出来たと云ふのに御前會議の席上各重臣も声をあげて泣いたと報じたソ連の參

戰と落下傘式爆弾の前に遂に屈伏したものだ。阿南陸相は辞世の和歌を残して自殺してしまつた。たとへば正巳は帰れなくても勝つて貰いたかつた毛唐の下で働くなつて思つただけで口惜しくて涙が出る神も佛も無い世になつた。学校から帰つた將校達が皆で泣きましたと大佐殿が云つていた。後で聞いたが只口惜しいアルミ貨の引換も何回となく心に掛けて集めては銀行へ出し干芋の供出も人に笑はれたつて構ふもんかと割当二十一貫目以上必ず刈らうと意気込んで八貫余りも出来たと云ふのにもう何をする気も出ない。丸で夢の様だとはこの事だ。夢であつたらどんなに嬉しかろう。

八月十六日 晴

夜中に目を醒ましては太息考えても考えても残念で堪らない。特攻機も美智子の工場で見事に予定数が完成したと云ふの。只の一回も飛ばずに降伏とは——新次郎も来た聞けば聞く程無念さが増す計り兵士に使用した敷布をやつと洗つた。何れも手に付かぬ鈴木寛太郎首相以下総辭職の報を聞いた。が後継内閣の生ずるまで政務を見よとの御言葉を承る時折ち——と情報が入る敵は——と云ふまだ戦つて居る様に思へてならない。敵機も時折飛來する降伏せずにまだ戦つて居るのだ。たら——と泣けてならない。勇ましい國の守りの軍人が隊をなしていつに変わらぬ音で行くのを見てもこの兵士の姿をもう見る事が出来なくなるのか。いつまでもいつまでも後の世に残しておこう。正巳その他の軍人写真を宝として大切に大切にこの家に残さう保存しよう。

八月二十四日 曇天

ペンを執る気も無く今日まで日誌を開かない。その間鈴木首相の私邸焼打の噂。東條前首相暗殺の話も聞く。いよいよ二十六日に敵國の軍が本土に進駐して来る。先ず空軍が厚木飛行場に。着陸次いで海から相模湾三浦半島銚子方面に入港する。予定で千葉茨城その他進駐する兵地への鉄道線路切符の発売を禁止する。軍部も連日重要書類の焼却に多忙らしく穴を掘り書類や飛行機の原型焼きの為に物凄い火焰をあげて居るとか。昨日の降雨は農作物に大きな

恵みの雨だけれど喜びを云ふ人も無く盆も迎へ送って何とも寂しい川尻の子供らも任三郎に送らせて返したが川尻では敵軍の宿舎に当てられるのを懸念して小妻へ非難既に夜具食糧は運搬済との手紙だった作谷飛行場では敵が来れば必ず切込をするから二里四方の住民は避難するようと軍からの通知を受けた

九月一日 雨

八月二十五日より今日迄の間台風の為連合軍の本土進駐が四十八時間延期された事を報じたが空軍だけで海軍は予定通り入港の報あり空軍は四機編隊でこの上空を通過した我が皇軍機の飛ぶ時はいつも駆け出して見上げたが今は少しも見る気がせぬ住子は下館へ帰り敦子もおしんと共に深谷へ帰った義も勇も同じ様に何をする気も出ないで心が空になった様だ時折正巳——を胸に浮べては幾分元気をとり戻して居る敗戦国のみぢめさ今後は食糧不足に不安な生活をせねばならぬだろう今よりは只喰はんが為にのみ働く事になろう商売などより食糧増産以外に仕事など無い

九月三日 曇天

空蟬のもぬけのからに等しい精神には何の感情も起らず下館も敦子も居らず只とぼとぼとその日を送るのみ山本まささんが来て語るのを半ば夢心地で聞き帰った後で何を聞いたか分らなくなる午前中畑で甘藷のつる返しをした夕方美枝子と兎の草刈に行き帰って夕食隊長の奥様湯に來たが語る気も無く入浴すまして床に入るけたましくぐり戸を叩く音に起き出ると新次郎が帰ったのだった食事を済まして少し語り床に入る今後の生活について不安は誰も同じながら連合軍の指揮下に働く嫌さを思ふ時是非とも俵給生活を止して農業で働きたい希望らしい

九月四日 小雨

軍部から拂下げになった革沓常会を通じて配給する事になり各班に渡した

他町村は一戸一足つゝ配給人により公職を持つ者は三足位受けた人も有る当田井村は軍に協力して居ないと云ふので実際は他には見られぬ協力をして居ながら村長の処し方の為村民の誠意は認められず拂下品まで他に比べて意外の感がある村の役員が一足つゝ分配を受け残り常会に五六足のみの分け前となった村民の不満思ひやられる朝七時の報道に連合軍進駐について婦女子に対し注意があった思ふに野獸性を現はし暴行を働くらしい地獄のどん底に落ち込んだ様な気がする動けば動く程底深く沈み行く様なあがきのとれないのが今の日本人だろう

九月五日 晴

連合軍進駐後早くも暴行事件二百数十件の多きに達したとは驚く外ない土浦高女へ憲兵分隊長が来て話しをしたと云ふが第一に彼らの欲しいものは日本服婦人の長袖その次は女次に時計万年筆など婦女子に対しては笑顔を見せたら最後何をされるか分らぬさりとて変な顔をしたら又面白がつて何処までもついて行くと云ふやり方で隠れるのが第一ださうだ赤い派手な色を身につけぬ事東京では当分分校と報じて居たピストルを突きつけての事として恐ろしさこの上ない

九月六日 晴

総理大臣の今日迄の戦争の経過発表を聞いて又もその意外さに驚いた開戦当時世界の海軍国として堂々たる海軍力を有して居り総トン数六百余万トンであったものが休戦当時二十余万トンになり飛行機も月産最高十九年夏に三千機近かったのがその後減少し一千機程となり空襲を受ける様になつてからは三四割程度の産に過ぎない状態になり戦争続行不可能になつて居たと云ふ事を聞き無条件降伏も止むを得ないと国民も諦めた事だろう海外南方の兵士や住民は船舶が無いので連合軍に貸与を申し入れたが貸与せぬとの由破損した自国の船を修理して使ふ事を許されたが修理機能も低下して居るので早急に帰国は出来ぬと報じたから正巳の帰国は何時の事か分からない

九月八日 曇天

朝五時の報道を蚊帳の中で聞いた南方離れ島に居る兵士の全員帰国までには昭和二十三年末までかゝるとの報に思はず声をあげた思へば二十一才の十二月に入営して二十三年末で満八年間の苦しい生活に精根も尽き果てた事だろろう着衣はボロボロとなり帰った折には見るかげも無い姿らしい報道だった家庭に於いても充分親切にしてやらねばならぬと云ふ事だった云ふに及ばぬ事だ親としての心境何に比すべくも無い辛ひ思ひで帰国を待ちわびて居るのだもの健康でさえあれば帰れるけれど三分の二が病人と聞く以上案ぜぬわけに行かぬ連合軍上陸以来殺人暴行掠奪など至る処に行はれて居るとラヂオや新聞で報じて居るましてソ連軍の進駐せる満州では殺人掠奪の限りを尽くされ言語に絶するものが有るとの由

九月九日 小雨

降るでも無いが時折サラサラと来る気をもむ天気今朝主人の言葉に今日で四日義が一言も語らぬ何が不満か今後の事を考えねばならぬと云ふあゝ又主人も義も不快な日を過ごしているだろう親子揃って楽しく語るのを聞いたらどんなに嬉しいか知れぬが何時も何時も不和の仲に立って双方の心裡案しながら身も心も疲れ切つて六十三才で頭髮は八十近い人と同じになつて了つた御先祖様にお願ひしてもやつぱりどうにもならぬ気を大きく大きく持つてどうにでもなれと脱れたく思つてもそうなれない一生不和の間に立つてハラハラしながら世を終るかと思ふと日誌を記きながら涙が浸み出て遂には日誌の上にポタリと落ちる自分の努力が足らぬからと気を取り直して見もするがいつそ世を去つたらこの苦勞が無くてすむとも考えるしかし正巳を思ふと老ひても元気で彼を迎へて長い間の辛苦を慰め勞らつてやらねばならぬとも思ふ

九月十日 曇天

心から信ずるでも無いが三ヶ月に一度位は参拝に行くので今日も天理様へ

40

お参りに行つたこんな信心何になるう自ら恥じるが天理様だけは有難味が薄い今日も心は暗いが兔の飼料草刈りに行く広い野辺に出ると家の中のくさくさも忘れていい気持だ午後兵士が帰郷の挨拶に二人で来た敗戦国と云ふ悲しい名を持つ日本からこの勇ましい軍人姿が消え去つて了ふのだ連日の様にマツカーサーの報道を聞いては気を腐らす計り

九月二十九日

防空壕壊し主人先導で始まつた子供らは皆一丸となつて働く義も加はり総勢九人何れも遊びの達人計りだが美智子と春子が大いに役立ち地ならし迄済んで了つた新次郎から手紙が来た読むうちに涙がひとりでに流れた男四十の盛りこの敗戦の大転換期に農業を志した新が意外にも父の怒りにふれ苦悩を続けて居る様が文面に溢れて居る

十月四日 雨

米国側の報道によれば日本国の食糧は今后一年間に数千数万人の餓死者を出す事が明らかにされた新宅のおさださんの叔父さんの咄によると甘藷を作つたがまだ掘らぬ先に見知らぬ人が掘つて居るので止めたところ食べずに居られぬから掘りますと云ふので掘つただけにして止してくれと云へば入用だけ掘らせて貰ひますと云つて掘る手を止めないので実に恐ろしい却つてこちらが気味悪くなつたと云つて居たとの由敗戦国のみちめさ斯くまで否より以上になるだろうと聞かされた

十二月十二日 晴

今朝のニュースでマツカーサーより日本農民のドレイ化を是正する様日本政府に申入れがあつたと報じたこれにより農事改正法がいよいよ実施される事になつた商業を小さくして農業になるか何れか決心する時が来た小作人が何人も来て今度の農事改正による土地売買の相談を持ちかける地主より小作人が急ぎ込む始末

十二月十三日

直が下館へ行くべく駅に行ったが切符売切との事で戻って来た何処へ行くにも不便の上無し敗戦国の惨めさはこの上どうなるか分らぬ噂では七割五分が税と云ふがその日暮らしの生活で只喰はんが為にのみ生きる事になる今朝来た小作人の云ふところでは地主から土地を買って代金は政府から二十余年の年賦で借りその間買った土地へうんと課税されおまけに二十余年もの借りで精神的に落着かぬそんな事になったら困るから実施にならぬ内に売って貰ひたいと申込んで来た昨日の新聞によるとニューギニヤよりの復員軍人は二十二年春で全員引揚完了との事だ来年夏までに全員復員と聞いていた耳には又大分遅れるの感がある然し早い者は既に帰った人も有るので今にも只今——と来さうな気がする帰ってから着る彼の着物を仕立てたく気を張って日々の仕事に精が出て自分ながらよく働けると思ふ戦前不自由無く呑気に暮した折を思ひ浮かべる

十二月十四日 晴

マツカーサー司令の下日本国民は今后どうして生活を続けるか農業以外は認めないなら日本人は只喰はんが為に働くのみとなつてしまふ小作人を援助して自作農として一人前に生活出来る様になし地主特に大地主は色々な方法で財産を巻き上げられ一般人と同じ程度に引下げられる事になった地主は只同然で土地を売り渡すはめになりそれを買ひたいと云ふ小作人が朝早くから押しかけて主人も忙しい

【昭和二十一年】其の後

一月十八日 晴

体の具合もやつと元に戻ったがまだ働けぬ気が出ないラヂオで聞くところでは復員船が昨十七日広島の大竹港に入った様だが正巳がその中に居るかと

42

うか居ないとすれば二月八日から十一日迄に入る船に乗るだらう枯木を風呂敷で包んだ様になつて居るかそれとも元気が思ふと心がおどる

一月二十日 晴

下館へ商品を引渡しにやった雇人が夜に入つて帰り語るのを聞いて驚いた村田を出てから大島までの田甫で三人組の怪しい連中に出会つて油の缶を盗られるところだったのが三人を相手に渡り合ひ遂に三人を叩き伏せてやつと帰つたとの事油缶をリヤカーから解いて持ち去ろうとしたところを拳でアゴを打ちのめしたので地上に投げ出して逃げ去つたと云ふ食料品と見ての夕暮時の迫はぎだったとは驚いた

一月二十二日 晴

昨日の雨に少し春めいて温かくなつた復員船の便りを何より楽しく聞いて居る二十三年一杯で無ければ復員完了せずと聞いて居たところマツカーサー司令の援助で予定より早く進行ニューギニヤ全体の復員がこの一月一杯で完了と聞いて何とも云へぬ嬉しさに胸が躍る遂に逢へる日が来た然しどんな風だろう不安の中にも期待に元気が出て体が軽くなつた様だ

一月二十三日 晴

今朝は床の中に落ちて居られず五時前に起き出して了つた主人曰くそんなに喜んで居て一人だけ帰らぬと云ふ事が万一有つたらどうするか余り喜び過ぎて考えが浅いと云はれたさうかも知れぬ然し元気で帰つて来る思ひだけが胸を往來して居る近所の戦死者の人達を氣遣ひつゝ心の中では喜びに浸つて居る

一月二十五日 晴

ニューギニヤから突然復員した人の話を聞いた神郡では佐谷茂氏植木勇氏

43

飯田喜七郎氏飯田宇重氏館の桜井明氏の四人は戦死したニューギニヤの河部隊はラバルとホーランデヤに行った者を除き全部復員したが病院船は一日遅れて入港の筈と云ふウエワクの南方に有るニワトリ川の河辺に米兵が上陸当地に居た河部隊全滅だとか喜んで居ただけに驚きと悲しみが大きい夜は仲々眠れず思ひは思ひを生み頭がポーとした主人もぢつとしては居れず北条の復員軍人の宅を尋ねて様子を聞いて来た咄は昨日聞いたと同じ様で病院船に乗らぬとすれば望みはうすい新次郎も昨日来たので彼も心配して居るが沈んだ親達の心中を思つてか決つた分では無いんだから——と力付けてくれる義は横須賀へ行つて聞いて来ると云つて居る

二月五日

ニューギニヤよりの最後の復員船がこの八日に入港と聞いた十中の九までは生存者の中に居ないと覚悟して居るが心の奥では死してこの世に居ない者とは考えていないもし死亡していたらどうあきらめようあゝ——夜毎に聞く復員便りもニューギニヤは引揚完了で何の通信も無い正巳——

二月十二日

臼井弁財天の一年に一度の縁日で大そうな人出義広は正巳の消息が知りたく一番汽車で出かけた主人も玉取へ様子を知りたくて行つたが更に分らずがっかりして帰つた夕食半ばに沓音と共に軍人が入つて来た城庄一隊長殿で正巳君の事でお話がしたく来たとの事にはと胸を刺す奥の座敷に案内して話を聞くニューギニヤの戦況を前置きにして桜井君も遂に戦死をなされましたと聞いた時今更の様に胸せまり身内がふるふるのをどうする事も出来なかつた主人が「ははあつ」と云つたその声はふるふるへて居たさうして語り合つて居る内に言葉が出なくなつた自分はどうした事か涙も出ない言葉も常と同じに語れる頭がどうかして居る十時頃迄ほど語り終え食事を済まして又語つてくれた主人が明日午前中村の八人の者に聞かせて貰ひたく頼んだ隊長は快く承諾して十一時過床についた

二月十三日

今日午前十時から村内の人が集まる筈のところ九時前から伝え聞いた人々が二十余人も集まつた昭和十八年二月から終戦前までのニューギニヤの戦況を詳しく聞かしてくれた各自が持参した葉書を見て一々説明し照会先を記してくれたり親切に扱つてくれるので皆喜んだ十二時を過ぎる迄の三時間余りこれで話は終わりましたと云つても一人として立とうとしない隊長が空腹を案じて玉子を運んだので皆我に返つて帰つたその後で正巳の遺留品を見て頂いた坂東川の戦争に左手と左もゝに負傷野戦病院に入院した事を聞く不自由な躰が目に見える様で何とも云えぬ胸を掻きむしられる思ひがしたその後全快せぬ内に最後の戦旗山の戦には中隊長として参加隊の人数百九十七名の内生存者は只一人との事

二月十四日

今日は有りし日の正巳が胸に浮んで人さえ無ければ涙は止めどなく落ちる思へば短い一生だった昭和十五年十二月一日水戸東部三十七部隊へ入隊してから今日迄足かけ七年その間逢ひたいと思ふと狂ほしい程に逢ひたくなると白滝神社の参拝が如何に楽しかったか人無き山道で正巳の名を呼び彼と語る気持ちで一人言を云ふと逢つて語つた様な気がするそして涙が頬を伝つて地に落ちる五月一日ウエワク上陸以来の行動をつぶさに聞き言葉に尽せぬ苦勞を重ね坂東川の戦に負傷左手首と左足から腰にかけて貫通銃傷を受け救護所に收容され傷まだ全治に至らぬ内旗山の戦にはせ遂に戦死をとげたこの苦しい戦によく任務を全うして国に尽した功績は大きい只敗れた国日本の為には何でもない事となつてしまった任官した晴姿の写真を見るとこみ上げる悲しみに身をふるわせては泣く誰も居ない所と思ふだけ泣きたい写真に頼りずしては又思ひ泣く住子が良人を亡くしてやつと悲しみが薄らいだ今日又この悲しい思ひ子が無ければこの悲しみは無かるうに日々を涙に明け暮れて居る